

小児気管支喘息の臨床的研究 施設入院療法の問題点—入院中の経過について—

国立療養所南福岡病院小児呼吸器科 西 間 三 馨

対 象

昭和49年4月～53年8月の4年5カ月間に国療南福岡病院小児呼吸器科で長期施設入院療法をうけて退院していった135例127名の気管支喘息児である。年齢は3～15才(平均8.5才),性は男84例(62.2%),女51例(37.8%)で高年齢ほど男が多くなっている。

1. 背景因子:省略

2. 入院時検査:省略

3. 入院期間:平均342.2±219.4日で再入院者は166.9±91.9日であった。

4. 体位:全国平均値に対する患児群の体位の平均値の比を入院時と退院時でみると,身長は97.8±4.5%→97.2±4.1%,体重が89.9±14.3→91.2±13.2%,胸囲が99.9±6.0→98.9±5.8%と変化し,やや体重が増加しているが,いずれも有意差はなかった。ステロイド依存性患児は,体重の低値が顕著でなかでもステロイド依存性で入院が1年以上になった者が平均84%と最も低値を示した。

入院時の体位を,各々の平均値を境にして区切り,入院日数,発作率,聴診率をみると体重に最も相関があった。また高年齢ほど体重は低値を示した。

5. 発作の状況

PFRでみると入院後は入院3日目では発作は改善していた。入院中の発作率,聴診率を示すと図1のようであり,入院期間,性別,入院時ステロイドの有無,重症度年齢別に分けてみると表1のようになる。入院期間

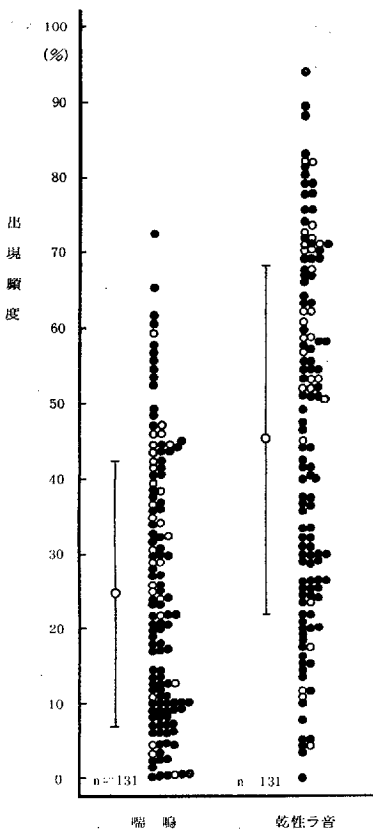


図1 喘鳴と乾性ラ音の出現頻度 (○は入院時ステロイド依存性患児)

表1 入院中の発作率と聴診率

		n	発作率(%)	聴診率(%)
入院期間	1年未満	81	19.0±16.6	38.1±22.4
	1年以上	50	33.7±15.0	57.1±19.7
性別	男	81	25.6±16.8	48.0±22.3
	女	50	23.0±18.7	41.1±24.4
入院時ステロイド	(-)	104	22.9±17.8	43.0±23.2
	(+)	27	31.1±15.0	54.1±22.0
重症度	中等症	14	11.2±12.2	25.7±19.5
	重症	117	26.2±17.4	47.7±22.7
年齢別	3～6才	32	23.6±20.5	41.8±25.8
	7～10才	64	23.9±15.7	45.1±21.4
	11～15才	35	26.8±18.1	48.9±24.5
全体		131	24.6±17.5	45.3±23.2

(喘鳴,聴診所見の記載の不充分な4例は除いた)

の長い群、ステロイド依存性の群、重症型は高率であった。また入院が1年以上と長くなれば、有症状率が50%以上の者については有効であったが、それ以下の者では必ずしも改善しなかった。またこの発作率の高値は図2でおかるように自宅外泊の影響が大と考えられた。

6. 入院前の欠席状況が正確に把握されている22名の入院前後の欠席率は図3のように著明に減少し、平均値 $12.9 \pm 7.6\% \rightarrow 1.7 \pm 1.4\%$ になった。また全児童(102名)の入院中の欠席率の平均値は $1.2 \pm 1.4\%$ であった。

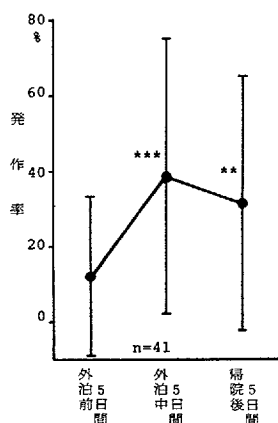


図2 自宅外泊前後の発作率

(外泊前との有意差*** $P < 0.001$, ** $P < 0.005$)

まとめ

施設入院療養は学童以前の幼児にも有効であり、体重、

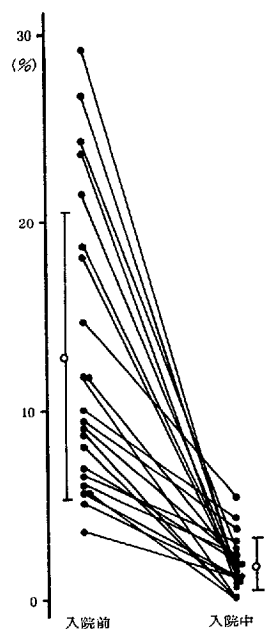
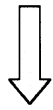
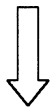


図3 入院前、入院後の学校欠席率の変化

身長劣る者は発作率や聴診率が高く、入院が長期となる傾向にあった。その有症状率が比較的低い者は1年以上の入院は必ずしもさらに症状を軽快させるものではなかった。発作率は $24.6 \pm 17.5\%$ 、聴診率は $45.3 \pm 23.2\%$ であり、入院前後の学校欠席率は著明に改善した。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



まとめ

施設入院療法は学童以前の幼児にも有効であり、体重身長劣る者は発作率や聴診率が高く、入院が長期となる傾向にあった。その有症状率が比較的低い者は1年以上の入院は必ずしもさらに症状を軽快させるものではなかった。発作率は $24.6 \pm 17.5\%$ 、聴診率は $45.3 \pm 23.2\%$ であり、入院前後の学校欠席率は著明に改善した。